
最後の約束の物語 ～俺とお前の最後の約束～

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の約束の物語 ～俺とお前の最後の約束～

【Nコード】

N5224T

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

ひと月ほど前に発売したRPG、最後の約束の物語を小説化したものです。

始まりと終わりと始まり

『そこを右です。急いでください』

耳に取り付けた受信用のスピーカーから聞こえる音声ガイドのとおりに、俺は崩落した市街地の脇道を右に抜ける。すると、目の前には脇道などは比べ物にならないくらい酷い有様になった居住区が姿を現した。

一見ただけで生存者がほとんどいないように思える居住区には、人ならざるモノが大量に湧いていた。

金属製の体を持つ——というより、金属そのものが意思を持って歩いているような物体、鋼機兵が俺の眼前に大量に湧いていた。

「こりゃ、骨が折れそうだな……」

俺の何かに反応した鋼機兵が視線（目、あるのか？）を向ける。

俺はそれを見て、今日一番の大きな溜息をついた。

魔導国家ユグドラ。それが俺の住む国の名前だ。

周りの人間は普通に「魔導」ってものが使えたし、俺も使えたからそれが普通だと思っていた。

国の人たちは女神、イーリアってのを崇拝してる。どういう神様

なのかはよく知らないし、知ろうともしなかったからその事については全然知らない。分かっているのは、イーリアっていう女神様がこの国の象徴みたいなものってことだけだ。

まあ、そんなことはどうでもよくて。

俺の名前はバベル・アルクトウルス。名前もファミリーネームも神話に出てくるものらしい。今年で十八歳になる。自己紹介としてはこんなところ。

リゼットが聞いてたら、「もう少し真面目にやりなさい」と言ってるだろう。あ、リゼットっていうのは俺の幼馴染のことね。

同じ士官学校で学んでいたのが去年のこと。いきなり飛び級だかなんとか知らないけど、メサイア付きの戦闘管制官とか言うのになって、それ以降あまり会ってない。

俺はその間、ずっとメサイアになるための訓練をしていた。

メサイアっていうのは、この国を守る七人の騎士のことを言う。その騎士には一人一人に「黄金の武器」っていうのが受け継がれていて、俺の知り合いにも何人かメサイアになった奴がいる。

黄金の武器はかなりの性能を持っているけど、それを使いこなせる人はそうそういないらしい。実力が足りなければ武器の侵食に体が耐え切れなくなって死ぬし、力を使いすぎると最終的に「イーリアの秘法」っていうのが発現する。

ある種、最後の手段として使われるイーリアの秘法だけど、場を弁えないで発現したらそいつはただの馬鹿だし、後世に伝えられる

騎士になることはまず無い。

そして今現在、俺は結構ピンチな局面に直面していた。

目の前には七体の鋼機兵。サヴィ・シャンティエ産のそれは、機械のくせに完全に俺を敵として見ている。

周囲に兵の姿はなし。大聖堂への避難が完了してるならいいけど、この鋼機兵たちにやられたと考えるのも普通の範囲だろう。

こいつらは今日の明け方、四時ぐらいに攻めてきた。殆どの兵や住民は寝ている時間帯で、宮殿の四方にある門の警備も最も手薄な時間帯だった。

俺も自室で寝ている時に緊急召集をかけられて、寝ぼけ眼のまま一番戦闘の激しい正門のあたりに放り出されたというわけだ。

よりによってどうして俺が……と思いもしたが、それも仕方無いことだろう。

士官学校での訓練では、俺は常に最高ランクのSを取得していたし、全ての武器がかなりの精度で使えたから次期メサイアとしては確定的だ。けど、いきなりこれはやりすぎじゃないかと思う。

動力部をキリキリと鳴らしながらじんわりと近寄ってくる鋼機兵からはかなりの不安感を煽られるが、俺の心は意外と穏やかだった。

数瞬の間を置いて鋼機兵が俺の元に殺到してくる。それでも、所詮はプログラムどおりに動くことしか出来ない金属の塊だ。動きを

見切るのは容易い。

俺は一步足を後ろに引いて愛用の武器——というより、グローブと脛当てだが——を構える。俺の得意な戦闘法は、徒手格闘だ。

鋼機兵の槍を躲し、間合いを詰めて高速の四連激を繰り出す。一発一発が重いと評判の俺の拳は、金属で固められた鋼機兵の胴を易々と打ち抜き、後ろの六体諸共吹き飛ばす。だが、俺の攻撃はこれで終わりじゃない。

吹き飛んだ一体の脚を掴んでそのまま地面に叩きつける。そして踵落として鋼機兵の動力機関を潰し、残りの鋼機兵も同じようにするために再び間合いを詰める。

ものの三十秒程度で俺は全ての作業を終えた。両手には鋼機兵から抜き取った動力機関が溢れている。そのままにしていると危ないんだよな。

『バベル、聞こえますか？』

動力機関を鋼機兵に見つからないように魔導で封印していると、受信用のスピーカーからリゼットの声が聞こえてきた。

『只今正門前でセレス殿下の部隊が敵と遭遇し、膠着状態になっています。至急そちらへ向かってください』

「セレスが……？ 分かった。すぐ向かう」

速攻で封印を終えて脚から脛当てを外し、俺はセレス殿下がいる

という正門前までダッシュで向かうことにした。

正門前にはかなりの鋼機兵がいた。確認しただけでも二十体以上。その中で、青銅で作られた槍を振り回す一輪の花を俺は見た。

こんな非常時に何を言っているんだと怒られるかもしれないが、血生臭い戦場で綺麗な女の子が戦ってたらそういう詩的表現をしてしまうのも無理は無いと思う。

俺がいる場所から百メートルちよつと先。そこで、戦場に咲く向日葵と名高い騎士、セレグリアス・ティナ・ユグドラシル——通称セレスが鋼機兵相手に戦っている。

状況が状況じゃなかったらもう少しここで眺めていたいけど、それが許される状況ではないらしい。

俺はセレスの槍と同じように青銅で作られた脛当てを装備すると、鋼機兵の軍団のもとに単騎で奇襲をかけた。

鋼機兵の軍団が俺に気付いて隊列を整えようとするが、それでも俺の動きよりは遅い。脚力にものを言わせて地面を蹴りぬき、一瞬にして距離を詰められた鋼機兵は一瞬動きが止まった。

「弾ける！」

俺は拳に紅属性の魔導の力を集中させ、着弾と同時に発生した爆風で周りにいた鋼機兵ごとセレスを取り囲んでいた鋼機兵を吹き飛ばした。

これが俺が自分で編み出した特技、「爆裂拳」だ。安直なネーミングだと言われたこともあったけど、発音的にこれが一番言いやすいから採用させてもらった。

「大丈夫か、セレス」

「え、ええ……」

歩いて近づきながらそう話しかけると、セレスは爆風でよろめいた体を立て直すようにゆっくりと立ち上がった。どうやら怪我とかは無いっぽい。

「よかった。セレスにもしものことがあったら陛下に顔向けできないから——」

「——っ！ アル！ 後ろ！」

突然叫んだセレスの声に反応して後ろを向く。そこには、斧を振り上げた鋼機兵の姿があった。

脳の奥がスパークしたかのように熱くなり、鋼機兵の動きがとてつもなくゆっくりにして見える。眼前に迫るのは、物理的な「死」そのものだ。

死ぬ間際には走馬灯が見えるって、昔誰かに聞いたことがあるけど、そんなのはただの迷信の類だと思っていた。

けど、実際に死を覚悟すると、走馬灯って物凄い速さで見えるんだな。

脳裏に浮かぶのはセレスの優しい笑顔。この笑顔が、もう見れなくなるのか――。

（つて、こんなところで死んでたまるか！）

俺にはまだやり残したことが沢山あるんだ。こんな所で死んだら、今まで俺を鍛えてくれたジャイロ参謀やレクレウル陛下にも顔向けできないだろ。

必死に振り上げた腕が突然の負荷に耐えられずに悲鳴を上げる。だが、そんな事もどうでもよくなるぐらいに俺の頭の中は一つの意識で埋め尽くされていた。

「生きたい」。ただそれだけだ。

だが、俺の拳が鋼機兵に命中するより早く、鋼機兵が横合いから受けた何かの力によって吹き飛ばされた。

「相変わらず詰めが甘いな、バベル」

俺の立っている位置から右側。そこに黄金の剣を携えたユグドラの王の姿があった。

男らしく逞しい体つきのユグドラの王の名は、レクレウル・セイ・ユグドラシル。ユグドラが誕生して以来最高の剣士の称号を持つ唯一の人間であり、この国で最強の人間としても知られている。

陛下の持つ黄金の剣の名は「神刀ザナドゥ」。メサイア黄金騎士団の指揮官のみが使うことを許される、伝説の武器だ。

潜在能力は他の黄金の武器と比較して最も高く、持ち主の耐久力や力を上昇させるという特殊効果まで付くらしい。

「レクレウル陛下！」

陛下の後ろからは、俺もよく知った顔が出てきた。

細身な体からは想像も付かないが、かなりのタフネスと溢れんばかりのバイタリティを持ち合わせた士官学校時代からの級友、ウォルフ・ステイングレイが、レクレウル陛下の後ろを追いかけるように走ってきた。

ウォルフは幼い頃にレクレウル陛下に魔導、剣術の才能を見出されて側近として育てられてきたらしい。そのせいでか、セレスとは当然のように仲が良く、剣の腕前だけならメサイア候補生の中でもトップの実力を持っている。

ありえない話だとは思うが、レクレウル陛下がもしもお亡くなりになったら、陛下の持つザナドゥはウォルフに受け継がれるというのが専らの噂だ。

そしてその場合、ウォルフが俺たちユグドラの民を率いる指揮官になるということだ。

ザナドゥを受け継ぐものには伝統的に「サー」の称号が与えられ、それはこの国で一番の権力を持つことを意味する。そうなった場合、俺が一番心配しているのはウォルフにそこまでの力量があるのか、ということだ。

指揮官として人々の上に立つなら、それに準じた覚悟が必要となる。レクレウル陛下は民衆にも慕われる圧倒的な存在感と力量、そしてカリスマを持ち合わせてはいるが、現時点でのウォルフにそんな大役が務まるとはとても思えない。

サヴィ・シャンティエがユグドラに進軍を開始して、城内に攻め込んでからたった一時間しか経っていないが、それでも死者、行方不明者は三万人を超したとさっきリゼットから無線で通信が入った。ユグドラの人口はおよそ三万二千人のため、現時点で生存が確認されているのはたったの二千人弱ということだ。

考えたくはないが、今の状況はいつレクレウル陛下が無理をしてイーリアの秘法を発現させてもしかたのない状況だということだ。

「陛下、御無事で何よりです」

俺は陛下がまだ顕在であることを目の当たりにしてホッと胸を撫で下ろす。メサイア黄金騎士団の面子はまだ全員無事らしいが、候補生の方は既に半数以上が犠牲になっているらしい。

そして今一番気になっているのは、死体の数が圧倒的に少ないということだが……どこかで救助を待っているのだろうか。もしそうなら早く助け出さないと。

「バベル、状況はどうなっている？」

陛下は俺に現在の市街地の状況を聞いてきた。見るからに生存者は無さそうだが、死体の数がやたら少ないというのは陛下も気になっているらしい。

「周囲に出血、戦闘の跡は多く見つけましたが、その割には死体の数が少ないです。全員が無事にどこかへ避難してくれていれば良いのですが、こちらの方では何とも……」

今はリゼットたち戦闘管制官が総力を挙げて要救助者の特定を急いでいるらしいが、あまり結果は芳しくないようだ。

「そうか。では、戦況はどうなっている？」

「はい。現在正門前から多数の敵が押し寄せています。このままでは、正門を封鎖するより前に正門を破られるのは時間の問題かと……」

ユグドラには正門、東門、西門、北門の四つがある。現在サヴィ・シャンティエの軍勢が最も多く押し寄せているのは、同じくサヴィ・シャンティエ方面にある正門からだ。

北門ではセレスやレクレウル陛下の弟君であるヨシユア殿下が善戦しているらしいが、それもいつまで持つことが……。

「なら俺たちは、これより正門の封鎖に向かう！」

「お兄様！ 私も連れて行ってください！」

陛下が俺とウォルフの士気を高めようとして大声を上げると、セレスがそれに食い下がった。陛下は最初からセレスを連れて行く気は無かったようで、セレスの突然の申し出に目を丸くしている。

だが、それも一瞬のこと。すぐに気持ちを切り替えた陛下は、セレスが頑固でなかなか退かない性格であることを思い出したように

大きな溜息をついた。

「足手まといになるな。それと、危なくなったらすぐに離脱することだ。いいな？」

「分かりました」

セレスは両手で身の丈ほどもある槍を持ち直すと、強い意志を持った瞳で陛下を見据えた。どうやら、覚悟は決まってるらしい。

セレスは魔導に関しての才能は多大にあるものの、近接戦闘能力に関しては若干不安なところがある。士官学校で共に学んでいた時期もあったが、魔導の成績はSでも、近接戦闘の成績は高くてもB程度だったような気がするから、かなり不安ではあるんだが……。

俺はそんな嫌な想像を払拭するように頭を振り、正門に向かって走り出した陛下たちの後を追うようにして地面を蹴った。

だが、走り出した矢先に俺の元にリゼットからの通信が入った。

『バベル、聞こえますか？』

「リゼットか。どうした？」

一旦立ち止まって通信に耳を傾ける。

『正門の第二区画より要救助者の救難信号を受信しました。現時点で遊撃が出来るのはあなただけですから、至急現場に向かってください』

聞き終わってから陛下たちの走っていった方向を見る。しかし、

既に陛下たちは居住区を抜けて正門に向かって走っていったところだった。

陛下だったら危ないことは全て自分が請け負い、比較的安全なものに部下達を遣わせるだろう。犠牲者が何人いるか分からないこの状況で、少しでも多くの人々を救うのはおそらく最重要優先事項だと思われる。

「分かった。規模はどのくらいだ？」

『おそらく二百人を超えるでしょう。何が起こるか分かりませんが、行ってもらえますか？』

「当然。要救助者のいる地点までのナビゲートを頼む！」
『了解しました』

俺は正門方向から第二区画へと進路を変更し、そっちに向かって走り出す。

今考えれば、この時の選択がこれからの戦況に大きな変化をもたらすことなど、俺には知る由も無かった。

「くそ……思ったより鋼機兵の数が多いな……」

正門の第二区画。サヴィ・シャンティエの生み出した鋼機兵の攻撃によって崩落した市街地を傍目に、バベルは必死に走っていた。

必死に——とは言っても、殆ど百メートル間隔で数十の鋼機兵に出くわすため、リゼットから通信を受けて十分以上が経った今でも目的地にはたどり着いていない。それだけの数を魔道を使いながらも一瞬で片付けて行くバベルの姿は十分に異常なのだが、今は緊急事態であるため泣き言は言っていられない。

「リゼット、民のいる場所まではまだかかりそうか？」

「いえ、もうすぐそこまで——」

リゼットが言いかけた瞬間、建物を一つ隔てた向こう側から悲鳴のような声が聞こえた。その声に即座に反応したバベルは、それまで必死で走っていた体にさらに鞭を打って速度を上げる。

曲がり角を曲がってバベルが見たのは、複数の鋼機兵が民を襲っている現場だった。

それも、数が凄い。既に正門が破壊されてしまったのではないかと錯覚するほどに多い。おそらく、目測だけでも二百はいるだろう。

リゼットからの報告通りなら、現在ここにいるのは二百名強。それだけの数を、これだけの数の鋼機兵が襲っている。

それを見て、バベルは、

「ふっざっけんじゃねえええええええ!!」

と、咆哮をあげた。

その声に反応したのか、はたまたバベルの持つ強大な魔力に反応したのかどうかは分からないが、二百あまりの鋼機兵が全てバベルのほうに向く。大量生産型の鋼機兵なので個々の性能は低い、これだけの数になればそれだけでかなりの脅威となる。

だが、それも一般人相手では、の話。

バベルは懐から一つの石を取り出す。紫色にぼんやりと光るそれは、ユグドラでは一般家庭でも使われるタイプの魔道石だ。

本来メサイア候補生としての戦闘訓練を受けたものなら、魔道石を使って戦闘なんて発想はしない。魔道石はあくまでも自身の失った魔力を回復するために使うものであり、それ以外に使う場合はかなり難しい制御が必要になる。

だが、バベルはその魔道石を高々と掲げ、

「この国を蹂躪せんとする鋼機兵に神の鉄槌を！」

そう叫ぶ。すると、魔道石の中に籠められた魔力が解き放たれ、魔道石から闇色の炎が溢れ出す。

バベルが一人で多数を相手にする時に使う大規模攻撃魔道、黒属性の『宵闇』が一瞬にして200もの鋼機兵を飲み込むほどに膨れ

上がり、闇色の炎は鋼機兵を飲み込んでいく。

炎が過ぎた後には、地面や建物に焦げ跡がついた以外は何も残ってはいなかった。

その光景に、民衆は歓喜の声を上げる。あれだけの数を、一瞬にして無にしたバベルの雄姿に歓喜する。この国にイーリアの加護がある限り、私たちは安心だと。

その様子を見て、バベルは、

「……馬鹿が、この国はもう絶望的だったの……」

東西の二つの門は既に閉じられたとはいえ、ユグドラの内部に入り込んでいる鋼機兵の数は見立て通りなら二千、三千以上だろう。それはここにいた二百体もの鋼機兵を見れば誰でもわかる。

それに、ここにいるのは陸上歩行型が主だが、サヴィ・シャンテイエの技術力から考えれば大型の四足歩行型や小型の——水路などから入り込んでくるようなもの、果てには飛行型の鋼機兵までいるだろう。

さらには、門の向こうではもっと多くの鋼機兵が犇はっめいているという。

最早、イーリアの加護に頼るだけではどうにもならないところまで来てしまっている。

（まあ、この国を見捨てる気なんてさらさらないけどな……）

バベルはそう思いながら、リゼットとの連絡を取って民衆を避難させ始めた。

ユグドラ滅亡まで、残り二十二時間。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5224t/>

最後の約束の物語 ～俺とお前の最後の約束～

2011年12月5日10時48分発行